
リリカルなのは 仮面の男

ジャン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

リリカルなのは 仮面の男

【Nコード】

N9208L

【作者名】

ジャン

【あらすじ】

男はとある情報を手に海鳴に戻ってきた。そして男はまた戦いを始めた。

第一話 仮面の男（前書き）

ライダーの姿はスピリッツの2号です

第一話 仮面の男

第一話 仮面の男

高町なのはは自称『平凡な小学3年生』と一人の男の物語だった。

「海鳴か。懐かしいな」

バイクに跨った男は久しぶりの町並みに懐かしさを感じていた。

「さあて。奴さんはまだ動いていないみたいだし。しばらくは情報でも集めるかね」

そう言つて男は駅前のある店に向かった。

一方なのはは塾の帰り、突然頭に響いた声のこと、そしてフェレットのことを考えていた。それを相談しようとして帰路に着こうとしたがふと翠屋の電気がついたままだった。普段ならもう閉店の時間なのなのはは入ることにした。

「あつなのは。今日は懐かしいお客さんが来てるわよ」

「え？」

桃子が笑顔を向けると、なのははカウンターに座っていた一人の青年を見た。その青年はなのはは古い友人だった。

「あつ！一文字さん！」

「よっ！なのはちゃん」

青年、一文字隼人は翠屋のちよつと前までの常連だった。職業はフリーカメラマンでいつも使い込んだカメラを持ち歩いている。なのはにとつて一文字は歳の離れた兄のような存在であり、また一文字も子供好きでよくなのはの面倒を見ていた。

「久しぶりだな。元気にしてた？」

「うん！一文字さんも元気だった？」

「ああ。やっぱり世界は広いな」

なのはは一文字から世界中の話を聞くのが好きだった。フリーカメラマンとして世界を放浪としている一文字の話はなのはにとつて魅力的な内容だった。

「桃子さん。コーヒーおかわり」

「はいはい」

桃子が一文字にコーヒーを差し出すと一文字はコーヒーを飲み始めた。

「やっぱりこのコーヒーは美味しいな」

「そう言うならケーキも食べてってくださいよ」

「そうそう。お前くらいだぞコーヒーだけ頼んでいくやつ」

「へいへいその内に」

「そう言えば一文字さん今日はどうしたんですか？」

なのはの疑問に一文字は。

「ん？俺はカメラマンだぜ。特ダネ在る所にならたとえ火の中水の中」

なのはは相変わらず軽い一文字の言葉に安心していた。

「一文字。どうだい？久しぶりに組み手でも」

士郎が一文字に道場での組み手を申し出たが。

「いや勘弁してくださいよ。こっちはいつも素手なんですから」

「お前の格闘センスはたとえ竹刀を持ってもハンデにはならんだろ」

等と冗談みたいな会話が繰り広げられているが、一文字は柔道六段、空手五段の武道派である。新聞社からは機動隊になったほうが良いのではないかとも言われたが本人曰く「ペンは剣より強し」のようだった。

「なら今度桃子をモデルに写真とってくれよ」

「おっとそいつはお断り。俺は女性専科じゃないんで・・・」

「まったく相変わらず固いやつだな」なのはの事は撮ってたくせに」

「ん？俺は女性に撮らない主義だが、なのはちゃんの頼みとあっちゃあ断れないよ」

「レスポンス」

[illegible]

とまあ数年前まで繰り広げられていた冗談の会話が成り立っている。

「それじゃ。いっつそさん」

「もう帰っちゃうんですか？」

「ああ！また顔出すよ」

そう言つて一文字は翠屋を後にした。なのはは今日拾つたフェレットのことを話そうと思つていたのだが一文字はそそくさと去つてしまつた。

(また今度話そう)

夜

一文字はバイクを走らせていた。理由は簡単、ある物の調査に赴いていたからだ。すると一文字の頭に何か響いた。

(お願い・・・助けて・・・)

「なんだこれ？」

一文字は誰かに発せられているテレパシーのようなものを感じ取った。

（僕に少しだけ力を貸してください！）

「……………」

すると一文字はバイクを反転させ来た道に戻った。テレパシーの場所を探るとそこは動物病院だった。そこで一文字はとんでもないものを見た。黒い怪物に追われるのはだった。

「なのはちゃん！」

「あつ！一文字さん！！」

一文字が咄嗟になのはを庇う様に怪物の前に出た。

「なのはちゃんどうしてこんなところに？」

「その……何かに呼ばれて」

怪物が襲い掛かってきた瞬間一文字はなのはとフェレットを抱えて人間とは思えない跳躍をした。

「凄……………」

一文字の身体能力に唖然とするのはだが。

「……………逃げろ」

「え？」

「いいから逃げろ！！」

普段の陽気な一文字とは違いきつい口調で言われたため、なのはは咄嗟に隠れてしまった。

「ぐおっ！！」

怪物の一撃を受けた一文字は地面に叩き付けられた。あまりの衝撃に地面は陥没している。

「くっそ・・・あれがジュエルシードの・・・」

一文字は立ち上がると目の前に居る怪物と対峙した。

「ぐおお！！！」

怪物の攻撃に思わず防御体制に入る一文字。

「これがジュエルシードの力か！！」

一文字が覚悟を決めたその瞬間。一文字は両腕を左に伸ばし、力を引き出す動きをとった。

「変身！！」

一文字の腰に巻きつけられていたベルトの風車が回転し凄まじい風を生み出した。

「なに！？この風！？」

なのはが目の前を見るとそこには一文字の姿は無かった。居たのは赤い拳に黒い仮面の戦士だった。

その言葉を聞いた瞬間、仮面ライダー一文字隼人は振り向いた。

「・・・見ていたのか？」

「その・・・ごめんなさい・・・」

気まずそうになるのはだが一文字は当然だと思った。この異型の姿を見られたのだから。

「まだ終わっていません!!」

なのはの抱いていたフェレットが声を上げると怪物が再生し始めた。

「逃げる!!」

「けど!!」

「ためらうな!!」

一文字はなのはを逃がすと再び怪物に対峙した。

「打撃は効かないってか・・・ならジュエルシードごと破壊してやる!!」

「駄目です!!そんな事したらこのあたり一帯が吹っ飛んじやいます」

一文字が構えた瞬間フェレットが叫んだ。正直ジュエルシードについて知識の無い一文字は構えを解いてしまった。

「くそ!!」

一文字は防戦になった。破壊すなわち周辺の破壊のため攻撃できない。

（くっそ・・・いつそ海にでも叩き落すか）

その頃一文字の戦いを見ていたのはは啞然としていた。攻撃できない一文字を見ていた。すると手にしていたフェレットがなのはに言った。

「あの人を助けたいですか？」

「え？方法があるの？」

「・・・はい・・・けど・・・あなたを巻き込んでしまいます」

フェレットの表情になのはは決心した。

「くっそ！ライダーアパンチ!!」

一文字のライダーパンチが怪物にヒットするが実体の無い怪物は分散しては再生した。

「くそ！本当に海に叩き落すか!!」

「一文字さん!!もう一回怪物をバラバラにしてください!!」

「なに!?!」

一文字が振り向いた瞬間そこには白いロープと表現したほうがいいのか姿の変わったなのはが居た。

「なのはちゃん！その姿は！？」

「話は後でゆつくりします！！」

フェレットが叫んだ瞬間一文字は怪物を片手で受け止めた。

「ライダーアきりもみシュート！！！！」

一文字は怪物を真空投げで空中に放り投げた。無防備になっている怪物に向かって一文字は跳んだ。

「空中ならバラバラにしても破片は広がらないぜ！！」

一文字のジャンプは怪物の上を行った。

「ライダーアキイック！！！！」

仮面ライダーの必殺技。ライダーキックが炸裂すると怪物はまた碎け散った。一文字もジュエルシールドを破壊しないように力は絞っている。すると地上でなのはが呪文を唱え始めた。

「ん？」

するとなのはの持っていた杖にジュエルシールドが回収された。

「どうなった？」

「大丈夫です。封印は完了しました」

杖がなにやら答えている。一文字となのはは変身を解いた。

「一文字さん・・・その」

なのはは突然自分に起きた変化に戸惑っているようだったが一文字は冷静だった。するとサイレンの音が響いた。

「もしかして。もしかなくてもここに居る私って」

「疑われるだろうな」

すると一文字はなのはとフェレットを担ぐと自分のバイクに乗せた。

「え！えっと」

「ずらかれ！！」

「ごめんなさい！！」

一文字が一目散にバイクを走らせた。公園に着くと一文字はなのはとフェレットをベンチに座らせた。

「ほら」

「あ、ありがとうございます」

なのはは一文字から差し出された缶ジュースを手にした。とりあえず自己紹介することになった。

「私は高町なのは。みんななのはって呼ぶよ」

「俺は一文字隼人。またの名を仮面ライダー」

「僕はユーノ・・・ユーノ・スクライア・・・スクライアは部族名なのでユーノが名前です」

そしてユーノからなのはへの説明が開始された。そして説明が終わるとなのはが一文字に質問した。

「・・・あの・・・一文字さんはなんでここに」

「ああ、なんか頭に響いて・・・そのフェレットさんの声がな」

「すみません・・・もしかしてあなたも魔導師ですか？」

「いやそうじゃないが」

「じゃあなんで思念通話が」

「どうやらテレパシーの類は偶然拾ったんだろうな・・・俺から送信することはできないけど」

「そうですか・・・」

ユーノは納得すると一文字の肩に乗った。

「さあてと。こんな夜中だし、なのはちゃん、送っていくよ」

「はうゝお願いします」

一文字はなのことを家まで送った。すると恭也達に見つかってしまったのだが、一文字の説得とユーノの事で納得したが許す条件が一文字と恭也の組み手だった。

翌日

ユーノから送信されるジュエルシードの情報と流れ。翠屋でコーヒを飲みながらそれを聞いて一文字は思った。

（やれやれとんでもないことになったな）

ふと考える一文字。正直ジュエルシードが危ないということは知っていたが物理破壊が難しいということだった。

（これは結城あたりに手伝ってもらうかね）

テレパシー送信兼ジュエルシード封印のための装置を作るため仲間に連絡を取ろうとしたその時。

（ジュエルシードが活動を始めました）

それ聞いた一文字は。

「桃子さんごちそうさん！！急いであるから代金ツケで！！」

「え？ちよつと一文字さん！！」

慌ててバイクを走らせた。向かったのはどこかの神社だった。ちょ

うどそこにはなのはも居た。

「なのはちゃん！」

「一文字さん!!」

目の前に居たのはケルベロスのような化け物だった。

「あれいったい!？」

「下がってる!!」

「一文字さん気をつけてください!! 実体を持った分強力になります」

「オツケー……」

一文字は変身ポーズをとった。

「変身!!」

するとベルトの風車が回転し一文字の姿が変わった。

「トウ!!」

一文字のパンチが怪物にヒットする。

「なのはちゃん! 下がってる!!」

「え?」

「戦いは俺に任せろ・・・」

「ちょっと一文字さん!!」

怪物と一文字の攻防が繰り広げられる。なのはは今自分にできることをしようとする。この間の変身の呪文を言おうとするが長かったのか覚え切れていない。

「うわ!どうしよう!!」

「落ち着いて!なのは落ち着いて!!」

慌てふためくなのはをユーノが落ち着かせる。

「ライダーアパアンチ!!」

一文字のライダーパンチが炸裂し悶絶する怪物は苦し紛れになのはに向かっていった。

「しまった!!」

一文字が怪物を追うが間に合わない。

「きゃああ!!」

するとなのはの持っていた赤い珠が光だしなのはの姿が変わった。そして結界のような物がなのはを守った。

「え?」

「なに？」

その光景に一文字もユーノも驚いていた。

「い・一文字さん!!」

「わかった! トウ!!」

一文字が跳躍し怪物の上を取った。

「ライダーアアキイック!!」

一文字のライダーキックが炸裂した瞬間なのはの呪文が唱えられジユエルシードが封印された。

「ふう〜終わった〜」

一文字は変身を解くと、なのはを送るためバイクに跨った。

「ほら! 乗った乗った」

「はい!」

こうして一文字となのは、そしてユーノのちょっと変わった日常が終わっていった。

第三話 戦いの重さ

第三話 戦いの重さ

「よっこらせつと」

一文字が改造ベッドから起きると調子を確認した。

「悪かったな結城。急に呼び出して」

「なぐに。気にしないでください・・・それにしてもジュエルシードを小さな女の子が・・・情けない・・・俺たち大人が無力なんて」

目の前の男、結城丈二はそう言った。

「だから俺の再改造を頼んだんじゃないか」

「再改造って程じゃないですけど。ジュエルシード封印機能とテレパシー送信機能を付けただけですよ？」

「十分だ」

「・・・一文字さん・・・俺も行きます・・・子供にそんな危険なこと」

「いや・・・お前はもしもの時のために残ってくれ・・・このジュエルシード事件・・・まだ裏がありそうだ。もう少し調べてみる・・・」

「わかりました」

一文字は結城の研究所を出るとバイクに跨った。そのまましばらく道なりに走った。

「とは言ったものの。正直俺だけの力でどこまでいけるか・・・あいつ等も転々としてるしな」

一文字がぶつくさ言っていると目の前にフラフラになった、なのはが歩いてきた。

「ん？なのはちゃん？」

「ああ一文字さん・・・地獄に仏」

「良くそんな難しい言葉知ってるな」

「家まで乗せてってもらっていいですかあ？」

「お前に頼まれちゃ断れねえや」

実際なのはの体力の限界を感じていた。一文字は呼びのヘルメットを、なのはに渡すとなのはを後ろに乗せた。

（情けねえ・・・子供にこんな負担かけるなんて）

一文字は自分の無力を呪った。だがなのはは自分の意思で戦うということを決めた。それを一文字は止めるとは言えない。ならば自分にできることをする。

「そう言えば一文字さん」

「ん？」

「明日の約束」

「ああ、大丈夫。ちゃんと行くよ」

数日前

翠屋でいつものようにコーヒーを飲んでいた一文字に志郎が頼みごとをしてきた。

「一文字。今度ウチのサッカーチームの試合があるんだ」

「ほううーそいつは」

「そ・こ・で・だ！！お前にカメラマンとして写真を撮ってもらいたい」

「別に良いけど。俺高いよ」

ちよつとニヤける一文字に志郎は。

「子供たちの笑顔のためだ！！コーヒー代！！半年無料だ！！」

「へいへい。お引き受けしましょう」

元から断るつもりなんて無かった一文字だったりもする。

「なのはちゃん」

「ふえ？」

「明日は思いっきり休みな・・・ジュエルシードのことは俺に任せろ」

「ありがとう・・・けど・・・私もやらなくちゃ・・・」

その瞬間一文字はなのはのおでこを小突いた。

「そんなフラフラじゃ足手まといだフェレット。ちゃんとケアしてやれよ」

「・・・はい・・・すみませんお二人に迷惑をかけて」

「俺は別に良いけど、なのはちゃんの事はちよつとこき使いすぎかな」

「・・・はい」

「だったらちゃんと休ませな。俺もジュエルシードを封印できるようになったし」

それだけ言つと一文字は高町邸から去っていった。

翌日

志郎のサッカーチームの写真を一文字は撮影していた。

「一文字さん、手馴れてますね」

「おいおい、なのはちゃん俺はこつちが本職なんだぜ」

「じゃあ後で私たちのことも撮ってください」

「仕事終わったらね」

「じゃあみんな記念写真撮るぞ!!」

一文字は相手チームを含めサッカー少年たちの記念写真を撮った。

翠屋にて激励会が開かれている。一文字もカウンターに座りながらコーヒーを飲んでいた。

「それにしても志郎さんうれしそうですね」

「まあな。子供たちの喜ぶ顔が好きなんだ」

「ふうん。まっ俺も同じですけどね」

その時一文字は何かを感じ取った。その波動のようなものはキーパー少年から発せられていた。

（まさか・・・ジュエルシード）

「ん？どうした？一文字」

「え？あいや。写真出来たら送りますよ」

一文字は店から出ると外の席に座っていた、なのは達の元へ行った。目の前で遊ばれているユーノに思わず噴出しそうになる一文字だが。

「あ！一文字さん」

「はい。仕事も終わったし。約束の記念写真とでも行きますかね」

なのは、アリサ、すずか、ユーノが並び記念写真が撮影された。するとアリサとすずかは一文字の持っているカメラに注目した。

「随分使い込んだカメラ使ってるんですね」

「デジカメにすれば良いのに」

「まあこういう商売やってるとね。手放せないカメラの一台でも出て来るんだよ」

「そういうもん？」

「職人肌ってやつ？」

そしてなのは達と分かれるとき、キーパーの少年を追った。

「どこ行った？」

一文字の目の前でキーパーの少年が女の子に宝石のような医師を渡そうとしたその時。

「駄目だ！！その石を捨てるんだ！！！」

「「え？」」

一文字の叫びも虚しくジュエルシードが発動してしまった。町に樹木が襲い掛かる。

「くそ！！変身！！」

変身ベルトが回転すると一文字は仮面ライダーに姿を変えた。

「ぐおおおお！！！」

樹木の破片が一文字に襲い掛かった。吹き飛ばされる一文字。

「ライダーパンチ！！」

一文字は襲い掛かってくる樹木を破壊するとコアを探した。

「あの子達はどこだ！！！」

仮面ライダーの聴覚は人間の十数倍であるその聴覚でコアを探し当てた。

「あそこだ！！」

一文字がコアに向かおうとした瞬間樹木が一文字の身体を羽交い絞めにした。

「ぐあ！くつそ！！」

その時桃色の閃光が走った。一文字を拘束していた蔓を破壊しコアを攻撃した。一文字がその方向を見ると。

「なのはちゃん！！」

なのはがレイジングハートを構えていた。拘束を解かれた一文字は跳んだ。

「トウ！！ライダアアキック！！」

一文字がコアを破壊し中に封じ込まれていたキーパーの少年と少女を助けた。そして一文字はベルトを起動させた。

「ジュエルシールド封印！！」

ベルトの風車が回るとジュエルシールドがベルトに吸い込まれ封印された。戦いが終わると一文字なのはが居るビルまで向かった。そこで沈んでいる、なのは。

「なのはちゃん……」

「……一文字さん……私……分かってたんだあの子がジュエルシールド持ってるって……けど気のせいだと思っちゃった……」

なのはの目には破壊された町が焼きついていていた。

「なのは……なのはは良くやってくれてるよ！！！」

ユーノが必死に、なのはを慰めるが一文字はユーノを摘み上げた。

「ちょっと一文字さん!!」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・一文字さん？」

「・・・・今はそつとしいてやれ、なのはちゃん・・・・下で待つて
るぞ」

それだけ言い残し一文字はなのはを待った。なのはの魔法少女としての初めての失敗。もしかしたらあの二人が死んでしまったかもしれない。命の危機そのことを目の当たりにした、なのはの事を立ち直らせることが出来るのは他でも無い、なのはだけなのだ。

（なのはちゃん・・・・待つてるぞ）

一文字はそれだけを思い、なのはを待ち続けた。

第四話 決意を込めて

なのは初めての魔法少女としての失敗。何か知らないが恭也たちも、なのはの様子に気づき元気付けようとしたがなのは落ち込んだままだった。そこに追い討ちをかけるようにもう一人の魔法少女やジュエルシードの捕獲失敗。さらになのはは落ち込んでいた。

第四話 決意を込めて

なのはは一文字に連れられとある獵師町に来ていた。

「一文字さん！どこまで行くんですか？」

「もうちょつとで着くよ！ユーノもしっかり掴まってるよ！」

「は！はい！！」

必死になのはにしがみつくユーノ。海沿いの道をバイクで走っているため風が気持ちよい。

「なのはちゃん！帰りに釣りでもしていくか？」

「え！遠慮しておきますー！！」

しばらく街道沿いを行くと一文字はバイクを止めた。

「着いた」

なのはが一文書のバイクから降りると一軒のバイク屋が立っていた

立花レーシングクラブ

一文書が中に入ると中にバイクを修理している中年の男が居た。

「立花藤兵衛さんですか？」

「・・・隼人？」

藤兵衛は加えていたパイプを落とした。

「ども・オヤツさん。お久しぶりです!!」

「この馬鹿たれ!!連絡のひとつもよこさねえで!!・・・元気だったか!!?この野郎!!」

説教が終わった途端笑顔で一文書を迎え入れる藤兵衛。

「え?立花のおじさん」

「ん?なのはちゃん・なのはちゃんじゃないか!？」

「知り合いなんですか？」

一文書は二人の面識があつたことに驚いていた。

「昔ちよつとな・・・なのはちゃん。士郎君や桃子さんは元気になっているかな？」

「はい!!」

なのはが笑顔で答えると藤兵衛はキッチンからポットを持ってきた。

「ふう〜。久しぶりのオヤツさんのコーヒーはやっぱりうまい」

一文字は懐かしい気持ちになっていた。

「なのはちゃんはジュースかな？」

「は・はい？」

「君はこれ」

「キユ!」

藤兵衛はなのはにジュースをユーノにミルクを出した。

「ところで隼人。今日はどうした？」

「いえ。色々ありましてね。そういえばあいつは？」

「ああ、いつものところにな・・・ん？」

藤兵衛はなのはの様子を見ると表情が変わった。

「・・・隼人・・・悪いが外してくれないか？」

「へいへい」

一文字はそれだけ言うとなのはを藤兵衛に預けた。そして藤兵衛はなのはに向いた。

「なのはちゃんどうかしたのか？」

「え？いや・・・なんでも」

「無理に話す必要は無い・・・君は昔からそうだったから辛い事があっても一人で抱え込んでしまう・・・けどな。君の周りには隼人や士郎君だつて居る。それだけは忘れないで欲しい・・・ジュースもう一杯飲むかい？」

藤兵衛がなのはのグラスを掲げようとしたその時。

「・・・聞いてもらつていいですか？」

「ん？」

口を開いた、なのはに藤兵衛はグラスを片付けるのを止め、なのはの話を聞いた。なのはは藤兵衛に自分が魔法少女であること、そして失敗したこと、もう一人の魔法少女のことも話した。

「・・・そんなことがあったのか・・・だから隼人が・・・ジュエルシードか・・・」

「・・・信じて・・・くれるんですか？」

「信じるとも・・・他でもない、なのはちゃんの言葉だからな」

藤兵衛の笑顔になのはも自然と笑顔になった。だが、その笑顔も束の間だった。

「あの子が来たら・・・あの子とも戦わなくちゃいけない」

「本当にそれだけかい？」

「え？」

「なのはちゃん。君は優しい子だ本当は戦いたくないんじゃないのか？」

「でも・・・」

「なら簡単なことじゃないか・・・君の気持ちをその子にぶつけてみればいい。悩むのはそのあとからでも遅くない。それに隼人だっている」

その時なのはが何かを感じた。前に取り逃がしたジュエルシードの鼓動だった。

「立花のおじさん！行かなきゃ！！」

「気をつけて行ってくるんだ・・・」

藤兵衛はやさしい笑みを向けてなのはを送り出した。

「あの子・・・あいつ等に似てるな」

すると一文字が入ってきた。

「オヤッさん。なのはちゃんは」

「行っちゃったよ」

「いけね!」

一文字も慌ててなのはを追いかけた。

「あれは!? ジュエルシード!」

なのはが見たのはこの前取り逃がしたジュエルシードだった。そしてそこには赤い狼がいた。

「ぐううううう!」

狼はなのはに狙いを定めるとなのはに襲い掛かった。なのはがバリアジャケットに変身しレイジングハートを構えるが赤い狼は接近型のようになのはに向かって飛び掛った。

「きゃあ!」

狼の牙がなのはに向いた瞬間結界が繰り広げられた。ユーノだった。

「ユーノ君!」

「なのは！！懐に入られちゃ駄目だ！！」

距離を置こうとする、なのはだが狼は食らいついてきた。振り切れないそう思ったその時。

ブウウウウウウン！！！！

凄まじいバイクの爆音が響き、なのはと狼の間を割って入った。なのはは一文字だと思ったが違う人物だった。背中には薔薇のマーク、胸には巨大なSのマークのシャツを着た男だった。

「えい！やあ！！」

男は狼に一撃入れるとなのはを保護した。

「あなたは？」

「ご存知・・・城茂よ！」

城茂と名乗った男はなのはを介抱した。

「なんでこんなところに！？」

「答えは一つだ！悪党の現れるとこ、必ず俺も現れるって事よ！！」

「グウウウウウウ！！！！」

赤い狼は茂に向かって吼えた。

「確かアルフさんといったな・・・お手並み拝見と行くぜ！！えい！！！！」

茂はそのままアルフと呼んだ狼に飛び掛った。なのはも追いかけてうとしたが追いついた一文字に止められてしまった。

茂はアルフの牙を掻い潜りながら拳を入れた。そしてアルフにジャンパーを外されてしまいよろけた。

「へ！噛みたけりや噛んでみろう！！」

自分の腕を差し出す茂。正気かと思ったなのは。アルフが茂の腕に噛み付くとアルフが感電した。

「ぐ！うつつう！！！」

流石に口内の衝撃は厳しいらしい。もがいているアルフ。

「へっへへへ！今のはほんの小手調べだ・・・さあていよいよ本腰を入れるか・・・驚いて目を回すなよ！！！！」

茂が力を引き出す動きに入ろうとした瞬間。無数の光が茂を襲った。

「なに！？」

茂が振り向くとそこには金髪の少女が立っていた。

「子供？」

驚いている茂に少女は杖から光を放つ。相手が子供ということもあ

り茂は手を出せない。

「ぐあああああ！！！！」

膝をつく茂。そしてジュエルシードは少女が回収してしまった。少女が茂にトドメを刺そうとした時。

「エレクトロファイヤー！！！」

茂が手袋を外し高電流をながしその場を撤退した。

「すまねえ一文字さん俺のせいで・・・」

「気にするな・・・相手が子供じゃ俺も戦えなかっただろう。それにお前が着てくれなかったらなのはちゃんが危なかった」

「やっぱり一文字さん達も同じことを？」

「まあな・・・」

一文字はなのはとユーノを乗せかえる準備をした。見送りに藤兵衛と茂もいた。

「それじゃあオヤツさんまた今度」

「ああ、またな。なのはちゃんいつでも遊びにおいで」

「はい！」

「なんかあったら俺もすぐに駆けつける」

「茂さん・・・ありがとうございます!」

「じゃあ行くぞ!」

そう言うとなのは達は立花レーシングクラブを後にした。

第五話 すれ違い

第五話 すれ違い

現在一向は温泉に向かっていた。高町家の恒例行事で全員車移動だったが二人だけバイク移動だった。

「どうだい？バイクの乗り心地は？」

「風が気持ちいです！」

「車も良いけどたまにはバイクも良いだろう？」

高町家の旅行に招待された一文字。現在一文字の後部座席にはすずかが乗っている。最初はなのはが乗っていたがバイクにも乗ってみたいというアリサとすずかのお願いで交代でバイクに乗ることになった。

「おっ先に！」

一文字がなのはたちが乗っている車を追い越し先に温泉宿にたどり着いた。その後でなのは達が到着し適当にくつろいでいると温泉に入るということになった。

「一文字さん。風呂行きましょうよ」

「俺は後で・・・話し相手居ないからこのフェレット君置いてつてくれ」

「わかりました」

恭也は先に温泉に向かった。部屋には一文字とユーノの二人だけが残った。

「一文字さん温泉に行かないんですか？」

「ああ、これを見られるわけにはな……」

一文字はユーノに変身ベルトを見せた。

「それ外せないんですか？」

「まあ外せないんだな」

「前から聞きたかったんですけど……一文字さんは何者なんですすか？あの力は」

「俺はしがないカメラマンさ」

「カメラマンの人があんな力持つてるなんて……おかしいです」

「やれやれ……そこまで言われちゃ言っしかねえか？」

ユーノの質問に一文字は覚悟を決めた。

「俺は……改造人間だ」

「改造人間!!」

ユーノも聞いたことはあるがまさかと思った。

「俺は人間じゃないんだ・・・だけど・・・人間じゃない実感なんてわかったつもりでもどっかではわからないんだよな」

一文字の言葉にユーノは絶句した。

（身体を改造されて心は人間のままでこの人は今までどんな気持ちで・・・）

「・・・怖いか？俺のこと」

その時一文字とユーノは何かを感じ取った。

「なんだこれは？」

「一文字さん！！こっちです！！」

一文字とユーノは気配のした方向に向かうと女性陣のいる場所だった。そしてオレンジの髪の女性がそこに立っていた。

「なのはちゃ・・・」

一文字がなのはに話しかけようとした途端頭に声が響いた。

（これは？）

（おや？思念通話も知らないのかい？）

念話の相手は目の前の女性だった。

（誰だあなた？）

（随分なこと言ってくれるじゃない？この間はよくも感電させてくれたね）

一文字は茂が戦ったアルフと呼ばれた狼を思い出した。

（ほうゝこの間の狼さんがこんな美人さんだったとはね）

（随分軽いわね）

（お前さんがここにいてるって事は・・・ジュエルシールドもこの辺にあるってことか）

（あたり）

（ここで騒ぎを起こしてもお互いのためにならんぜ）

（じゃあもう一風呂あびるかね）

それだけ言うと一文字はなのは達を連れてアルフから去った。

夜

一文字はジュエルシールドの鼓動を感じ取り近くを散策していた。すると目の前を金髪の少女が横切った。

（・・・誰だ？こんな時間に・・・それにしてもなんて悲しい目だ）

すると今度は魔力反応を感じ取りその方向へ走った。そこには。

「あれは！なのはちゃん！それにあの子は！！」

一文字が見たのはなのはと先ほどの金髪の少女の姿だった。すぐに一文字はなのはの元に向かうが。

「おっと！フェイトの邪魔はさせないよ！！」

「ぐー」

アルフが狼形態で一文字に襲い掛かった。受け止める一文字。すると何処かの場所まで転移されてしまった。

「ここは・・・テレポーション？」

「お前のジュエルシード・・・貰うよ！！フェイトのためにね！！」

「フェイト・・・それがあの子の名前か？」

一文字は変身ポーズをとった。

「変身！」

ベルトの風車が回り一文字は仮面ライダーに姿を変えた。

「トオ！！」

一文字とアルフは構えた。

「はああ!!」

アルフの攻撃を一文字は受け止めた。そして一文字も殴りかかった。

「この!!」

「ライダーパンチ!!」

一文字のライダーパンチのカウンターがアルフを襲った。悶絶するアルフ。

「・・・心配するな・・・手加減はした」

「・・・くっ・・・強い」

アルフの言葉に一文字は冷徹に答えた。

「へっ・・・俺が今まで何人の改造人間を殺してきたと思う?」

「なっ」

言葉を失うアルフ。今の一文字の姿に恐怖すら感じる。ショッカー、ゲルショッカー、デストロン、GOD、デルザー軍団、ネオショッカー、ドグマ、バダン、クライシス帝国。数々の組織と激戦を繰り広げてきた一文字。そして何より『殺してきた』のキーワードに反応したアルフ。

「お前をこのまま倒してもいいんだがな・・・今あの子の支えにな
っているのはお前みたいだからな・・・」

「・・・なに？」

「たしか・・・プレシア・テストロッサだったか？お前たちのボス
は？」

（この男なんでこんなことまで知っている？）

アルフは混乱した。目の前にいる男はジュエルシードをただ集めて
いるだけの男かと思っていた。だが自分たちの素性を知っている。

「何で俺がそんな事知ってるかって顔だな・・・言い忘れたが仮面
ライダーは俺だけじゃない・・・」

「！！！！」

アルフは恐れた。目の前にいる男のような人物がまだいるという事
実に。

「そこまで知ってて何で来ないんだい？」

「生憎・・・俺が知ってたのはジュエルシードの事だけだね・・・
ジュエルシードを探っていたら黒幕が現れると思ってたが・・・ど
うやら他のみんなも動いていたみたいだな」

「まさか城茂も・・・」

「ああ、仮面ライダーだぜ」

あの男が変身してたらどういうことになっていたか再びアルフは恐怖した。その時だった。

「！！なのはちゃん！！」

一文字が空を見上げるとそこにはフェイトに首を狩られそうな、なのはの姿だった。一文字はすぐに助けに入ろうとするがアルフに止められてしまう。

「逃がさないよ！」

「く！！」

するとなのはのレイジングハートからジュエルシードが一粒出た。フェイトはジュエルシードを回収するとその場を去った。

「じゃあね・・・一文字隼人・・・あんたのジュエルシードも必ず貰うからね」

アルフはそれだけ言うと一文字の前を去った。

「大丈夫か！？なのはちゃん」

「一文字さん・・・私・・・」

「・・・何も言わなくていい」

一文字となのはは変身を解除すると旅館まで戻った。

第六話 ライダー対ライダー

第六話 ライダー対ライダー

いつもの通り一文字は翠屋でコーヒーを飲んでいた。するとなのはが言ってきた。

「そういえば思ったんですけど」

「どうした？」

「一文字さんって仮面ライダー2号なんですよね？」

「ああ」

「じゃあ仮面ライダーって他にも居るんですか？」

「まあな後10人ほど」

「へーたまに皆さんで集まったりするんですか？」

「おいおい。部活動じゃないんだ。そんな用も無く集まったりしないよ。もっとも戦いが起きたら別だけどな」

「え？」

「仮面ライダーって戦いがあるところに必ず行く。甲斐が無くてもな」

一文字が再びコーヒーに口をつけるとテレビのニュースが流れた。

『臨時速報です！！ただ今宝石強盗が起こり犯人は仮面ライダーと名乗ったということです！』

「ブウウ！！ゲホツ！ゲホツ！ゲホツ！！！」

「いいいい文字さん！！大丈夫ですか！？」

コーヒーを噴出した一文字の背中をさするなのは。

「どういうことだ！！？」

「もしかして誰かが」

「そんな馬鹿なはずは無い・・・ジュエルシード？なのはちゃん今日はもう帰るんだ」

一文字は翠屋を飛び出すとバイクに跨った。そして事件現場の宝石店で降りた。すると現場の人間から一文字は取り囲まれた。

「なんだ・・・あんたたち」

「お前バイク乗りか？」

「ああ、この先に停めてきたか」

「バイク乗りは信用できねえ」

「仮面ライダーかもしれないからな」

一文字は騒ぎが広がらないうちに撤退することにした。

（この町の住人は仮面ライダーに不信感を抱いている・・・もしジュエルシールドが狙いならなのはちゃん危ない！！）

一文字は高町邸に急いだ。

一方なのはは部屋で考えにふけていた。

「はぁ・・・一文字さんどこ行っちゃったんだろう」

するとなのはの部屋のドアがノックされた。

「はい」

なのはが部屋のドアを開けるとそこには仮面ライダーが立っていた。

「ちょっと一文字さん！いくらなんでもふざけすぎですよ！ー！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

仮面ライダーは何も言わずなのはに近づいた。

「一文字さん？」

すると仮面ライダーはなのはの首を絞めはじめた。なのはの身体が宙に浮く。

「なのは！この！なのはを放せ！ー！」

ユーノが仮面ライダーに体当たりを仕掛けるが仮面ライダーは揺るがなかった。

「ゆ・ユーノ君・・・い・一文字さん！！・・・やめて」

「なのはちゃん！！」

戻ってきた一文字が目の中の仮面ライダーを殴り飛ばした。なのはが仮面ライダーから解放されると一文字がなのはの前に立った。

「大丈夫か？なのはちゃん！！」

「い・一文字さんが二人！！？？？」

なのはは目の前の一文字と仮面ライダーの姿を見てパニックになっていた。

「お前は・・・本郷？」

だが目の前の仮面ライダーは手袋とマフラーの色が違ってた。

「いや・・・本郷じゃない・・・貴様ショッカーライダーか！！変身！！」

一文字は仮面ライダーに変身するとショッカーライダーを追いかけた。一文字が表に出るとショッカーライダーの姿は消えていた。

「逃がしたか！！」

「うわあああああ仮面ライダーだ!!」

目の前を通り過ぎた人物は一文字に恐怖している。

(・・・一度変身を解くか)

このままの姿で行動することが出来ないため一文字は変身を解き再びなのはの部屋に行った。

「なのはちゃん大丈夫か？」

「はい・・・一文字さんあれは」

「ショッカーライダー・・・俺たちの後継機みたいなもんだよ」

「え？」

「さてと。ちよっくら行ってくるか・・・」

「行ってくるってどこへ？」

「あんだけ目立つんだ。目撃者くらい居るだろう」

一文字は目撃者の証言を頼りに地獄谷へ向かった。

「おっと・・・おいでなすつたな・・・」

一文字が振り向くと6人のショッカーライダーが立っていた。

「雷よ!」

ショッカーライダーの電撃が一字に襲い掛かる。一字はとつさに避けると変身ポーズをとった。

「変身！！」

ベルトの風車が回り一字は仮面ライダーに姿を変えた。

「ライダーキック！！」

一字がライダーキックを繰り出すがショッカーライダーは右腕を掲げた。その途端見えない壁にさえぎられ一字のライダーキックが抑えられた。

「防御結界！？」

一字は距離を置くとショッカーライダーの一人が魔力弾を放ってきた。

「ぐ！お前たち俺の知ってるショッカーライダーじゃないな」

「その通り・・・俺たちは更なる改造を受け格段に性能が上がった・・・ある男の手によってな」

「へっ・・・大方そいつもプレシア・テストロッサとか言う奴とつるんでるんだろ？」

「貴様に答える筋合いは無い！」

ショッカーライダーがそのまま空高く舞い上がった。

「ライダーキック!!」

「く!ライダーキック!!」

ショッカーライダーと一文字のライダーキックがぶつかり合う。

「トオオ!!!!」

一文字が風力エネルギーを蓄えるとショッカーライダーをライダーキックごと貫いた。一文字はそのまま降り立ちショッカーライダーが防御結界のある前にライダーパンチで破壊した。残り4人するとショッカーライダーたちは一文字を羽交い絞めにした。

「なに!?!」

「ふん!!」

「ぐあ!!」

そのまま殴りつけられる一文字。その時桃色の閃光がショッカーライダーに命中した。爆風を利用し一文字は抜け出すとショッカーライダーを殴り倒した。すると一文字は閃光が走った方角つまりなのはと合流した。

「なのはちゃん!」

「一文字さん!!」

「何で来た!」

「だって一文字さんだけをつらい目にあわせるなんて」

なのはの表情を見た一文字は。

「へっ・・・じゃあやるか危ないから前にだけは出るな・・・ユーノ、なのはちゃんを守ってくれ!」

「わかりました!」

「じゃあ行くぞ!」

一文字となのは、ユーノのコンビネーションがショッカーライダーを追い詰めていく。ショッカーライダーにライダーパンチで強襲し、またしてもショッカーライダーを倒した。残り3人。

「一文字さん避けて」

なのはのレイジングハートの光弾がショッカーライダーを怯ませた。

「よし!とお!!ライダーキック!!」

一文字のライダーキックがショッカーライダーに炸裂した。

「ぐあああ!!ライダー以上の力なのに!!」

目の前で爆発するショッカーライダー。

「ちい!!」

ショッカーライダーが魔力弾を一字に放つと結界が構築され魔力弾を防いだ。

「ユーノ君！」

「油断しないで!!」

「うん!!」

なのは再びレイジングハートを構えた。

「トオ!トオ!!」

一字の拳がショッカーライダーに突き刺さる。

「ライダーパンチ!!」

一字のライダーパンチがショッカーライダーを貫いた。またしても破壊されたショッカーライダー。残りは2人となった。

「馬鹿な!俺たちはライダー以上の力なのに!!何故だ!!」

「へっ!俺たちにはお前たちに無いチームワークがあるからな」

一字の接近戦、なのはの遠距離戦、ユーノのサポート、バランスよく構成されそのため一字のはのはの動きがわかり、なのはも一字の動きがわかった。ユーノもバックアップに回ることとで防御は気にしなくて良い。そうこうしているうちにもう一人のショッカーライダーが破壊され最後の一人になってしまった。

「く！」

ショッカーライダーはサイクロンに跨り撤退した。

「逃がさん！！」

一文字もサイクロンで追いかける。デッドヒートが繰り広げられると一文字は跳んだ。

「なに！？」

「ライダーアアアまあんじキイック！！！！」

ショッカーライダーは防御障壁を展開するが一文字のライダーにキックが貫きショッカーライダーを破壊した。

「一文字さん！！」

「なのはちゃん」

「あれは一体？」

「わからない。だがあのショッカーライダーは何者かによって手を加えられていた・・・裏で一体なにがあるんだ」

一文字は謎が謎を呼ぶこの怪奇事件を黒幕を突き止めなければならぬ。この後地獄谷の一角で戦う仮面ライダーの映像が公開され仮面ライダーは無実となった。

第七話 空翔る（前書き）

今回は一文字ものも出ません。

第七話 空翔る

第七話 空翔る

「仮面ライダー・・・」

モニター画面には一文字隼人Ⅱ仮面ライダー2号とショッカーライダーの激戦が映し出されていた。

「・・・ジュエルシードの場所に必ず現れるわね・・・それも強大な力・・・」

「・・・僕が行きます・・・この質量兵器とも取れる人を放っておくとジュエルシード以上の脅威になるかもしれません・・・ジュエルシードを追っていれば彼に出会うでしょう」

少年クロノ・ハラウンがアースラから出撃した。

「すごい風だ・・・とても高く飛べる・・・」

ハングライダーの青年、筑波洋は大空を満喫していた。海岸を飛んでいると一人の少年を見つけた。

（この辺の子かな？）

洋は挨拶すると再び旋回を試みるが風が乱れ始めた。

「うわ！降りるか」

洋は海岸に降りると先ほどの少年・クロノ・ハラオウンに出会った。

「あなたは誰ですか？」

「誰って観光客だよ」

「そうですか・・・この辺は危険です・・・早く非難してください」

「そんな風には見えないが」

「普通の人間じゃ絶対に回避できません」

その時洋は悟った。

（・・・なるほど・・・時空管理局の魔導師か・・・ジュエルシードを追っていれば黒幕に近づくと思ったが、時空管理局も動き始めたか・・・）

その瞬間洋とクロノはとてつもない気配を感じ取った。

「なんだ!？」

大空から一羽の巨大なカラスが舞い降りた。そしてクロノと洋に光線を浴びせた。

「く!」

「ぐう!」

あまりの弾幕に押されそうになるクロノ。そこに洋が立ちはだかった。

「あなた!逃げてください!」

「・・・・・・・・・・・・・・・・!!!!!!」

洋は逃げようとせず、むしろクロノを庇うように前に立っている。

「聞こえないんですか!」

カラスから光線が発射され洋を飲み込んだ。

「くそ!!なんで!!」

クロノは咄嗟に飛行して回避したがクロノには洋の行動が理解できなかった。

「馬鹿な人だ・・・」

すると爆炎が晴れそこには一人の人間が立っていた。

「あれは・・・」

クロノは驚愕した。現れたのは黄緑の仮面の戦士だった。

「仮面・・・ライダー・・・新しいタイプ」

「セイリイイグジャアアンプ!!」

仮面ライダーはベルトの重力低減装置を起動させると大空へ舞い上がった。

「空を飛んだ!?!」

「そう!俺は空を飛べる仮面ライダー!スカイライダーだ!!」

スカイライダーはそのままクロノとジュエルシードモンスターの間に入った。

「あなたは一体!?!」

「話は後だ・・・俺と一緒に戦ってくれるか?」

スカイライダーはそのままカラスに突進した。防御障壁に遮られながらも攻撃を仕掛けていく。スカイライダーは違和感を感じ取った。

「・・・ジュエルシードではない・・・ジュエルシードレプリカか」

「ジュエルシードプリカ？」

聞きなれない単語を聞いたクロノは魔力弾で真っ向勝負に出るがカラスには効いていない。

「馬鹿な・・・魔力が拡散していく！」

予測もしなかったことに驚いているクロノに再びカラスが光線を仕掛けた。

「！！！」

絶体絶命のクロノ。その時スカイライダーがクロノを庇った。カラスの攻撃を一身に受け海に撃墜されるスカイライダーとクロノ。

「・・・ううは」

「気がつきましたか」

洋が目を覚ますと洞窟のような場所だった。そして目の前にクロノが居た。洋の身体は手当てされているが洋は違和感を感じていた。

「すみません・・・人間の薬があなたに効くかわからなくて・・・」

「そうか」

治療の際クロノは洋が改造人間であることに気づいたようだ。

「奴は？」

「まだ外です」

「そうか・・・くっ！」

洋は起き上がろうとするがクロノに止められてしまう。

「無駄です！いくらあなたが質量兵器でも・・・それより教えてください
ださい・・・ジュエルシードレプリカとは一体」

「俺も詳しいことはわからない。ただジュエルシードに似ているが
ジュエルシードではない・・・ジュエルシードの寄生能力と特異変
化をもたらすものだという情報はある」

「ジュエルシードではないってことは・・・封印の必要はないって
事ですか」

「そつだ・・・さっきの戦いでわかったことがある・・・君は戦えない」

「なんですって？」

「いくら管理局の魔導師とはいえ、魔力が使えないんじゃない危険なだけだ」

「馬鹿にしないでください！あなたのような質量兵器・・・は！」

思わずクロノは口を塞いだ。洋は改造人間といえども自分のことを助けてくれたその洋に向かって失言をしてしまったが不思議と洋は微笑んでいた。

「怒らないんですか・・・」

「ああ」

クロノは洋の言葉に思わず飛び出してしまった。

（身体は機械なのに心は人間・・・あの人に対して・・・僕は）

その時カラスがクロノを捕らえた。クロノもデバイスを構える。カラスからの光線をクロノは防御結界で防ごうとするが防御結界はいつも簡単に破壊されてしまう。

「くっ！」

クロノは回避するが攻撃もできず防御もできない。もはやなす術も無いその時爆音が響いた。

「あれは！」

クロノが爆音のほうを向くとバイクに跨った洋の姿があった。そして洋は力を引き出す動きに入る。

「スカイ・・・変身！！」

洋のベルトが回ると洋はスカイライダーに変身した。スカイターボに跨りカラスに突撃していく。

「ライダーアアア！！ブレイク！！！！」

スカイターボの突撃技ライダーブレイクがカラスに炸裂した。

「大丈夫か！？」

「くっ！平気です！それよりそんな傷ついた身体で！！」

「大丈夫だ・・・けりをつけるぞ・・・セイリイイングジャアア
ンプ！！！！」

スカイライダーは空を飛ぶとカラスと対峙した。カラスの攻撃をかわしながら打撃を与えていく。カラスは徐々に追い詰められていくがスカイライダーに向かって光線を放とうとしたその時、カラスの口がバインドで縛られてしまい光線が暴発してしまった。クロノだった。

「今です！」

「よし！トオ！！スカアアイキック！！」

スカイキックがカラスを貫きカラスは消滅した。そしてスカイライダーとクロノは地上に降り立った。洋は変身を解いた。

「すみません・・・あなたにひどい事を・・・」

「気にしないでいいさ」

「あなたの名前は？僕はクロノ・ハラオウン」

「筑波洋だ」

「教えてください・・・あなたたちは一体何者ですか？」

「詳しいことは言えないが俺はこの事件を追っている・・・恐らく俺の仲間たちもだ」

「仲間？もしかしてこの間の・・・僕と一緒に来てもらえますか？ジユエルシードについて説明させてください」

「わかった」

こうして洋はクロノに案内されアースラに行くことになった。

第八話 戦う決意

第八話 戦う決意

一文字となのははジュエルシードを追っていた。そこにはきっとフエイトも居るからだった。

「変身！」

一文字のベルトの風車が回ると姿が変わった。そして目的地に到着するとジュエルシードとフエイトの姿があった。

「ジュエルシード・・・それにフエイトちゃん」

「一文字さん・・・ここは私に任せてください」

「わかった・・・行ってきた」

「はい！」

なのははフエイトの元へ向かった。

「さてと・・・思いつきり伝えてこい・・・」

一文字が空を見上げるとなのはとフエイトが対峙していた。両者には鬼気迫るものがあり一文字はその姿を見守った。

「仮面ライダー・・・」

「・・・アルフ？」

「ちよっかいは出さないのかい？」

「あの子達自身の問題だ」

「へえーじゃあ暇つぶしに遊んでよ」

アルフは構えるが一文字は構えない。それどころかアルフを見ずなのはただだけを見ていた。合間見えるその時閃光が起きた。

「なに？」

「そこまでだ！」

二人の間に入ったのは時空管理局執務官クロノ・ハラウンだった。

「ちい！今日のところは勘弁してやる！フェイト！撤退！！」

アルフがクロノに魔力弾を放ちながら撤退を開始した。

「くー！」

クロノがフェイトに攻撃を加えようとしたその時。

「やめろー！！」

「やめてくださいー！！」

一文字がクロノの攻撃を防いだ。そしてなのはもフェイトをかばっ

た。

「く！」

その隙を突きフェイトは撤退した。残されたのはジュエルシードとなのは、一文字、ユーノ、クロノだった。

クロノはジュエルシードを回収するとリンディの要請でなのは質をアースラに案内した。

クロノの案内でアースラにたどり着いたなのは達。

（ユーノ君ここは？）

（えっと自分とは違う世界があって・・・）

(えつとその)

(わかりやすく言う・・・)

（噛み砕いて言えばSFのパラレルワールドだ。ガリバー旅行記だと思えばいいんじゃない？）

(納得)

(すごい……さすが大人……僕も見習わないと)

一文字の簡潔な説明に納得するのはと脱帽するユーノ。

「その姿だと窮屈でしょ」

「あつそか」

「確かに……」

なのはと一文字は変身を解除した。するとクロノはユーノに視線を送った。

「君も」

「はい」

ユーノの身体が光ると少年の姿になった。

[illegible]

「なのはにこの姿を見せるのは久しぶりだね・・・？」

目の前のことに硬直しているのは。

「ほう、君も変身するのか」

「いいいー文字さんは知ってたんですか？」

「えつとなのはにこの姿で会わなかった？」

「会ってない会ってない？」

「俺はその場に居なかったからわからない」

「あの〜」

認識の不一致があつたなのは達はひとまず落ち着くことにした。そしてクロノの案内で艦長の私室に入ると一文字は啞然とした。盆栽に笠。

（日本文化を誤解してそうだな）

とりあえず座ってリンディの話を聞くことになった

「あなたたちの追っていたロストロギアジュエルシードは」

「えつとロストロギアってなんですか？」

「えつとロストロギアっていうのは」

「簡単に言えばオーパーツみたいなものだろう」

「ちょっと噛み砕かないでください。肝心なことなので」

「子供にはわかりやすいほうが良い」

一文字に文句を言いながら自分の説明を続けるリンディ。

（失われた文明の遺産ね・・・ギギの腕輪やキングストーンもそれに入るのか？・・・それにしても次元震ね。厄介な代物だな）

等と一文字は考えているとリンディがお茶に砂糖を入れた。

（あゝこうやって日本文化が誤解されるんだな）

「それと・・・もう一つはあなた達・・・仮面ライダーの目的は？」

「俺はただ拙い代物が動いているということと動いてた・・・みんなの事はわからないな」

「そうですか・・・洋さんも同じことを言っ僕たちの前から去りました」

「・・・そうか」

「とにかく・・・これから時空管理局の管轄になります。あなたたちは元の世界に帰りなさい・・・すぐに普通の生活に戻るのはいいかもしれないけど」

「送ろう・・・さっきの場所で良い？」

「え・・・うん」

一文字も無言で頷いた。

クロノの見送りで元の場所に帰ってきたなのは達はこれからのことを考えた。

「・・・どうしよう」

難しいことに考え込むのは。

「とりあえず・・・俺はジュエルシードを追う」

「え？」

「ジュエルシードを追ってればあの子も必ず現れる・・・それなのはちゃんだけじゃないぜ。心配している奴は」

「一文字さん」

「なのはちゃんの思うようにしてみる。ん？」

なのはの頭に手をやると一文字はなのはの前から立ち去った。

「とりあえず・・・うちに帰ろうか」

「うん・・・」

ユーノがフェレットの姿になると、なのはは高町邸に向かった。

なのはは考えていた。これからのことフェイトの事そして一文字の言葉。

（なのはちゃんの思うようにしてみる）

「うん」

なのはは決意すると桃子の元へ向かい自分の決意を話した。

「お母さん」

沈黙する桃子だが

「なのははもう決めてるんでしょうお友達のこと・・・やりたいこと」

なのはの覚悟が伝わった。

「お母さん・・・」

「心配しないでお父さんとお兄ちゃんは何とかするから」

「かわいい子には旅をさせろって言うしね」

なのはと桃子が振り向くとそこには良く知る人物が居た。

「「一文字さん!!」」

「よう。桃子さん。大丈夫俺も一緒に行きますよ」

「え？」

「過保護な士郎さんたちは許可なんておろさないでしょ」

「ふふ。確かに一文字さんが一緒なら安心かもね」

笑う桃子そして

（全く・・・誰が一番過保護なのかね・・・）

と一文字は自問自答していた。なのはの準備が整うと一文字のバイクに跨った。

「それじゃ。行こうか」

「はい！」

一文字はバイクを走らせるとメッセージを送った。

（ちょっと頼んだぜ・・・）

一文字のメッセージを10人の男が受け取った。

第九話 現れた黒幕

「なるほど・・・仮面ライダーが動いたか・・・これはちょうど良い」

軍人のような男がモニターを見て不敵に笑っていた。

「ゾル大佐・・・技術提供感謝するわ」

プレシアがゾルと呼んだ男は鞭を振りかざした。

「ふふふ。我らが偉大なるショッカー復活のため・・・この憎き仮面ライダーを血祭りにあげて見せよう・・・」

「それにしても・・・仮面ライダーね・・・以前私たちが作り上げた『彼』も仮面ライダーになるのかしらね・・・」

プレシアは不適に笑った。

「ふん!!」

ゾル大佐が鞭を振り上げるとそこには量産されたショッカーライダー、ジュエルシードレプリカがあった。

第九話 現れた黒幕

アースラにて一文字たちは搭乗員たちにリンディから紹介されてい

た。

「ええ、この任務に付きましてロストログアの発見者でもある結果魔導師の」

「ユーノ・スクライアです！」

「それと現地魔導師である」

「た・高町なのはです」

なのはとユーノは硬い返事をした。

「あと特別協力者でもある」

「一文字隼人だ」

と言ってアースラのメンバーに紹介が終わったのは達。

人数ブリッジで今後の段取りを聞くことになった。

「それじゃあジュエルシードの搜索はこちらでやるから見つかったら現地に向かってもらいます」

「艦長お茶です」

緑茶に砂糖を入れるリンディに対し正直開いた口がふさがらない一文字。

（やっぱりちゃんと教えたほうがいいかね・・・）

と思ったが一文字は止めておいた。

現場にて

「とおー!!」

一文字がジュエルシードモンスターを物理的に押さえているとユーノのバインドが雁字搦めにした。

「今だなのは!!」

「うん!ジュエルシード封印!!」

ユーノの指示でなのははジュエルシードを封印するとアースラに帰艦した。

「ふうお疲れさん」

「一文字さん・・・」

「ユーノもな・・・」

「はい・・・」

と一文字は思ったが止めた方がいいと思っただけらしい。

「まあ子供はゆっくり休んでな」

「子ども扱いしないでください」

「へいへい」

と言いながら一文字は用意された部屋に向かった。

一文字は考えていた。

（それにしても・・・ジュエルシードか・・・レプリカの数も減るところか増えている・・・それに後6つ・・・俺の体内に1つ・・・もしかしたら俺を狙ってくるかもしれない・・・よし）

一文字の頭にあることが浮かんだ。

「なのは・・・ごめんね寂しくない」

「うん。ユーノ君と一文字さんが居るし・・・一人ぼっちでも結構平気・・・ちっちゃい頃はよく一人だったから・・・」

「え？」

なのはは重い口を開いた。

「私ね・・・ちっちゃい頃お父さんが事故でベッドから出れないときがあつて・・・喫茶店も始めたばかりだったら今みたいに人気無くてお母さんとお兄ちゃんは今より大変で・・・お姉ちゃんはお

父さんの看病で……だから私……わりと最近まで家で一人で居る事が多かったの……あ！一人じゃなかった」

「え？」

「一文字さんが遊びに来てくれたの？」

「一文字さんが？」

「うん……一文字さん翠屋でコーヒー飲んだときにねお母さんから私の事聞いたんだって……最初は変な人だと思ってたけど……いつも会いに来てくれるうちに段々警戒心無くなっちゃって……」

「なんか……一文字さんらしいといえらしいね……」

「いろんな場所のお話聞かせてくれたな〜南アメリカとかヨーロッパとか……たまに英語教えてもらった……と言っても遊び会話くらいだけ」

「え？一文字さん英語出来るの？」

「うん一文字さん5ヶ国語くらい話せるみたいだよ」

「へ〜意外」

「一文字のことを話そうとしたユーノだが」

（なのはちゃんには俺が改造人間だって黙っててくれないか）

一文字の言葉が蘇りユーノは話すのを止めた。

（一文字さん・・・平気そうな顔してたけど・・・やっぱり人間じゃないことにコンプレックスがあるんだ・・・）

「そういえば私ユーノ君の家族のこととかあんまり知らないね」

「うん・・・僕は元々一人だったから」

「え？そうだったの？」

「両親は居なかったんだけど部族のみんなに育ててもらったから・・・スクライアの一族みんなが僕の家族」

「そっか・・・ユーノ君いろいろ片付けたらもっとたくさんお話しようね・・・」

「うん・・・色々片付いたらね」

「おっ青春してるね」

「いい一文字さん!!」

突如逢われた一文字にあたふたしているのはとユーノ。

そのとき警報が鳴り響いた。

『エマージェンシー！エマージェンシー!!』

「これって!!」

「行くぞ!!」

なのは達はブリッジに急いだ。

「なんだこれは・・・あんなことしたらあの子の身体がもたない!!」

一文字が見ているのはフェイトが魔力でジュエルシールドを強制発動させ海から出すという作戦だった。

「く!無謀すぎる・・・」

「フェイトちゃん!!あの・・・私・・・急いで現場で!!」

「心配するな・・・放っておいても彼女は自滅する・・・」

「え!」

なのはの思考が止まってしまった。自滅。一人の少女を破滅に追いやろうとしているクロノの行動が信じられなかった。

「なんだと・・・」

一文字はクロノの言葉が気に入らなかった。

「私たちは常に最善の選択をしなくちゃいけないの・・・例えどんなに残酷に見えても」

（そうかもしれないが・・・俺は子どもを犠牲にしてまで得るもの

なんて無い!!)

一文字が現場に向かおうとするが

「無駄です！魔力を持たないあなたはあの場に行く事が出来ません
!！」

「だが俺は気に入らない・・・」

クロノの言う事もっともだった。だが一文字の気持ちに許さなかった。

(くっ!!まだか!?)

一文字は現世界にいる10人に賭けたがまだ現れない。

その時

(行つて!)

なのはの頭に念話が響いた一文字の頭にもだった。

(ユーノ君!)

(僕がゲートを開く・・・行つてあの子を)

(けどユーノ君・・・私がフェイトちゃんと話したいのは・・・
ユーノ君には・・・)

するとユーノは笑って言った。

（・・・関係ないかもしれない・・・だけど僕はなのはが困っているなら力になりたい・・・なのはが僕にそうしてくれたみたいに・・・）

ユーノの中になのはとの出会いが蘇る。

ユーノがゲートを起動させるとクロノが阻止にかかるが・・・

「一文字さん!!」

「なのはちゃん!行け!!」

「あなたは何をしているのか分かってるんですか!!?」

「行かせてやれ・・・」

「一文字さん・・・高町なのは!指示を無視して勝手な行動に移ります!!」

「ユーノ速く!!」

「はい!!」

ユーノは転送魔術を開いた。

「あのこの結果の中へ・・・転送!!」

なのはの身体が転送されるのを確認すると一文字はクロノを放した。

「あなたはなんて事を」

クロノは一文字を睨み付けた。

「確かに俺はあんたたちに協力すると言っただがな・・・子供を犠牲にするような真似だけはしない!!」

一文字の言葉に黙ってしまうクロノ。その時だった。

「甘い・・・一文字隼人」

「!!」

アースラのモニターがジャックされるとそこにはゾル大佐の姿が映っていた。

「貴様ゾル!!」

「久しぶりだな一文字隼人・・・貴様を倒すために地獄の底から蘇ったぞ」

「く!!」

「さあ彼女たちの戦いを見物させてもらおうかな」

ゾルの視線の先にはフェイトの姿があった。

「ユーノ!俺を転送するんだ!!」

「なのはちゃん・・・フェイトちゃんを頼んだぞ・・・」

一文字はゾル大佐の元に向かった。

嵐吹き荒れる中ゾル大佐はフェイトの姿を見ていた。

「さあ来い一文字隼人・・・このゾルの身体の中から見てやるぞ」

「ゾル!!」

一文字が駆けつけるとゾル大佐と対峙した。

「来たか一文字隼人・・・貴様に滅ぼされたショッカーを今こそ蘇らせる・・・手始めにお前の首を貰う!!」

「まさか・・・ショッカーライダーやジュエルシールドレプリカを蒔いたのはお前か!」

「そうだと言ったら・・・」

「決まっている!ゾル!もう一度お前を地獄に送ってやる!!」

一文字が変身ポーズを取った。

「変身!!」

ベルトの風車が回り一文字は仮面ライダーに姿を変えた。

「ふん！！ワオオオオオオオオオオオオオオ！！！」

ゾル大佐も咆哮を上げると黄金狼男に姿を変えた。

「トオ！」

「ウオオオオ！！！」

黄金狼男のミサイルをかわしながら一文字は懐に入った。

「ライダーパンチ！！！」

一文字のライダーパンチが突き刺さるが黄金狼男は全く効いていない。

「馬鹿な！」

「ふん！！！」

至近距離で黄金狼男のミサイルを食らう一文字。

「ぐああああ！！！」

「一文字さん！！！」

「なのは！よそ見しちゃ駄目だ！！一文字さんを信じて！！！」

「く！！！」

「なのはちゃん！俺に構うな！！自分の精一杯の気持ちを彼女にぶつける！！」

なのはは一文字の言葉にフェイトにのみ集中することにした。

「フェイトちゃん！！手伝って！！」

「え・・・バルディッシュ・・・」

なのはがフェイトとリンクし始めた。

「小娘がなにをするつもりだ！！」

黄金狼男がなのは達を迎撃しようとするが一文字が押さえた。

「なに！？」

「へへへ！そうはさせませんよって！！なのはちゃん！今だ！！」

「わかりました！！せーの！！」

「サンダー・・・」

「ディバイン・・・」

「レイジ！！」

「バスター！！」

「やったか!!」

黄金狼男と対峙しながら一文字はなのはたちを見上げた。そこには6個のジュエルシードが封印されていた。

「後は貴様を倒すだけだ!!」

一文字が黄金狼男に向き合うといかずちが降り注いだ。

「なんだ!!」

「プレシア・・・」

「なに!？」

「くっくっくっく!!」

一文字が振り向くとアルフに溝を入れられてしまった。

「ぐは!!」

あっけなく倒れる一文字。

「一文字さん!!」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・!!」

アルフはそのままジュエルシードの回収に向かうが現れたクロノによって邪魔される。

「邪魔・・・するなあ亜あああああああああああ！！」

「うあああああああああ！！」

アルフがジュエルシードを見ると3つしかなくクロノが3つ死守していた。

「くううううううううううううううう！！」

アルフが撤退の為魔力を発動させた。

「ふん・・・仮面ライダーもあっけないな・・・」

黄金狼男によって気絶した一文字は回収されてしまった。

「一文字さん！！」

第十話 集結10人ライダー！

一文字はタイミングを計ったように目を覚ました。

「流石に気絶しすぎたかな・・・だが何とか懷に飛び込むことは出来たな・・・」

捕まったのは一文字の作戦だった。ボスの懷に入るには捕まるのが手っ取り早い。

「ここは一体・・・」

一文字はどこかの部屋に隔離されていたようだった。あたりを調べてみるとあるカプセルを見つけたそのカプセルは。

「プロジェクトF？」

「なんてことだ・・・」

第十話 集結10人ライダー！

「うおおおおおおおおおおお！！！！」

アルフがプレシアに襲い掛かるがプレシアの前では赤子同然だった。

「くー！」

「ふふふ・・・消えなさい!!」

プレシアの魔法で身体を射抜かれるアルフ。咄嗟に転移した。

「これは・・・くそ・・・」

一文字は目の前で倒れているフェイトを見つけた。その身体は傷だらけで衰弱も激しかった。

「おやおや・・・その人形が気になるのか一文字隼人」

一文字が振り向くとゾル大佐が立っていた。

「貴様いつの間に・・・」

「決着をつけるか？その為になんと捕まっただろう？」

「気づいていたのか・・・そうだな・・・決着をつけるか・・・だが・・・貴様何者だ・・・」

「なに？」

「貴様はゾルじゃない・・・戦い方が違う・・・何者だ？」

一文字は構えた。

「待ちなさい！」

一文字とゾルの間にプレシアが割って入った。

「プレシア・テストロッサ……」

「お前が仮面ライダーか……なるほど……『奴』と同じで人間の心を持ったままのようね〜不要ね」

「奴？……それより……この子をこんな目に合わせたのはあんたか……」

一文字はプレシアを睨み付けた。

「そうよ……この子は私の忠実な人形……だからどうしようと私の勝手だ」

その瞬間一文字がプレシアを殴った。

「な！」

「悪いね……子供を傷つけるやつは絶対許せないんだよ……それが親であろうとな」

「そいつは私の子じゃない!!」

「確かにあの子にあんたがお腹を痛めて産んだ子じゃない……けどな……それ以前に心を痛めて産んだ子じゃないのか？」

「黙れ!!」

「・・・奥のカプセル・・・見せてもらったよ・・・それにあんたはあの子を憎み切れていない・・・」

「黙れ!!」

プレシアの鞭をかわす一文字はフェイトを抱き上げた。一文字の目的は黒幕を突き止めることそしてフェイトを助けることだった。

「く!ゾル大佐!!傀儡たちを向かわせなさい!!」

プレシアはショッカーライダーとジュエルシードレプリカを一文字に向かわせた。

「ウオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!」

ゾル大佐も黄金狼男に姿を変えた。

「ちょっと待ってるんだ・・・」

一文字はフェイトを安全な場所に降ろすと変身ポーズを取った。

「変身!!」

ベルトの風車が回り一文字は仮面ライダーに姿を変えた。

「とお!とお!!」

一文字のライダーパンチが次々と破壊していくが数は一向に減らない。

「ライダーキック!!」

「走れ稲妻!!」

「ミサイル発射!!」

「キアアアアアアアアアア!!」

ショッカーライダー、ジュエルシールドレプリカモンスターの一斉攻撃を食らう一文字だがその攻撃を掻い潜りショッカーライダーたちを破壊していった。

だがギリ貧になり徐々に一文字の体力が失われていく。

「・・・・・・・・くそ・・・・もう・・・・」

すると一文字の目の前に眠っているフェイトの姿があった。その表情はどこか恐れているそのような顔だった。それを見た一文字は。

「さあて・・・・ジャンジャンいくか!!」

ベルトの風車が物凄い回転を引き起こした。

「ライダーパワー!!全開!!」

ライダーパワーによって身体能力がアップした一文字は次々とショッカーライダーを撃破していった。だがライダーパワーは諸刃の剣。一文字への身体の負担も絶大だった。

「く！とお！！とお！！」

現場にいた最後のショッカーライダーを倒した一文字は黄金狼男と対峙した。

「ウオオオオオオオオオオオオオオ！！」

「ライダー大車輪！！」

「ウオオオオオオオオオオオオオオオオ！！」

一文字の渾身のライダー大車輪がヒットし黄金狼男を倒した。

「はあ・・・はあ・・・」

一文字はそのままフェイトを連れて行こうとしたその時だった。

「甘い・・・仮面ライダー」

「なに！？」

倒されたはずの黄金狼男が起き上がった。しかしその姿に生氣を感じない。

「貴様一体！！」

「ふふふふ！！ガアアアアアアアアアアアアアアアアア！！」

黄金狼男の身体を突き破り中から現れたのは竜の怪人だった。

「貴様は!!」

「わが名はコバルトドラゴン・・・ショッカー最後にして最凶の怪人・・・」

「やはり・・・ゾルじゃなかったか・・・」

「そうだ・・・ゾルは私に仮面ライダーのデータをたたき出すためだけに蘇らせた人形だ・・・」

「へ・・・減らず口もそこまでだ!!ライダーパンチ!!」

一文字のライダーパンチがコバルトドラゴンにヒットするが逆に一文字の拳がダメージを負った。

「なんだ・・・堅い・・・」

「ふふふ・・・ライダーパワーを使い・・・ましてボロボロの今の貴様に俺を倒すことはできん・・・」

「ぶぐはあああ!!」

次の瞬間一文字のベルトが破壊されてしまった。

「ぐ・・・あ・・・」

「貴様のジュエルシードを貰う」

「ぐあああああああ!!」

コバルトドラゴンは一文字のベルトからジュエルシールドが引き抜いた。倒れる一文字はフェイトから隔離された。

一方フェイトはなのはとの決戦を控えていた。全てに決着をつけるために……

「く！」

「はあああああ!!！」

なのはとフェイトの攻防が続きついになのはが絶好のポジションにたった。

「これが……私の全力全開!!！」

「く!え!」

フェイトにバインドが施されていた。慌てて解除しようとするが間に合わない。

「スターライト……ブレイカー!!!!！」

なのはの空気中の魔力を収束させたスターライト・ブレイカーがフ
エイトを貫いた。

「うあああああああああああ！！」

落ちるフェイトを受け止めたなのは。その時凄まじい殺気がなのは
を襲った。

「高町なのはか・・・」

「え？」

なのはが振り返ると地上にコバルトドラゴンの姿があった。

「誰・・・あなた」

「ふふふ・・・君にプレゼントを用意した・・・受け取りたまえ・・・」

コバルトドラゴンはおもむろにベルトの破壊された一文字を投げつ
けた。

「い・い・いやあああああああああああああああ
あ！！」

一文字の姿に絶叫するなのは。

「精々早く直すんだ・・・そうしなければこいつは死ぬ・・・」

「死ぬ・・・一文字さんが・・・そんな・・・」

一文字を保護するユーノとアルフ。

「ユーノ君！アルフさん！！」

「なのは！撤退だ！フェイトを頼む！！」

「うん！！」

ユーノの転移魔法でアースラに転送された。なのは達が転送したのを確認するとコバルトドラゴンは転移の準備にかかった。

「さあて・・・まず手始めに海鳴を火の海に変えてやろう」

コバルトドラゴンは海鳴に向かってゲートを開いた。

アースラにて保護された一文字とフェイト。フェイトはともかく一文字が問題だった。

「一文字さんが・・・改造人間・・・」

「なのは・・・」

一文字が人間ではないそんな事実を突きつけられるのは子供には重すぎた。

「なのは・・・たとい一字さんが改造人間でも・・・一字さんは一字さんだよ・・・」

「ユーノ君・・・うん・・・一字さんが変わるはずない!!」

集中治療室に伏せている一字さんをなのは後にした。

「すぐ・・・戻ります・・・」

アースラでは武装局員によるプレシア・テストロッサ逮捕のための作戦が開始された。

武装局員はそのまま突入しプレシア・テストロッサを捕らえるが突如武装局員の一人が殺された。

「え!」

「ふん・・・この程度で我らショッカーに逆らうつもりか・・・」

目の前に現れたのはコバルトドラゴンだった。コバルトドラゴンの攻撃に沈んでいく武装局員たち。

「うつつうあああああああ!!」

プレシアは不適に笑った。

「もう人形を娘と言うのもお終い・・・わかってる? 貴方のことよフェイト」

その言葉にフェイトの心が砕けそうになる。

プレシアはアリシアのカプセルを連れジュエルシールドを発動した。

「はははは！私たちは行く忘れられし都アルハザードへ！！」

プレシアがジュエルシールドで次元震を巻き起こす。

「そんなことさせない！！」

クロノがプレシアを追おうとしたとき。

「良いのかい？私を追っているうちに海鳴が火の海になるよ・・・」

「海鳴に機影が・・・数・・・60・・・100以上！！どんどん増えます！！モニター画面に映します！！」

エイミイがモニターを見せるとそこには数々のショッカーライダー、ジュエルシールドプリカ、傀儡兵の行進が見えた。行き先は海鳴市だった。

「くっ！どうすれば・・・」

「このショッカーライダー軍団と傀儡兵で海鳴を血に染め上げる」

その時昏睡状態の一字が目を覚ましブリッジまで来た。

「さ・せるかよ・・・」

「死ぬ寸前の貴様になにができる・・・その身体ではまともに動く

「まい!!」

「一文字さん!無理しないで!!死んじゃう!!」

「言っただろ・・・仮面ライダーは俺だけじゃないってな・・・」

「海鳴に新たな機影が・・・数は・・・10!!」

「遅せ・・・え・・・くは」

エイミイの言葉に安心した一文字は気を失った。

「一文字さん!一文字さーん!!」

なのはの絶叫だけが響いた。

プレシアとコバルトドラゴンによって解き放たれた傀儡兵とショッカーライダー、ジュエルシードレプリカに襲われる海鳴市。警察が介入するが全く歯が立たないその時だった。

「V3キイック!!」

赤い仮面の戦士に傀儡兵が破壊された。赤い仮面の戦士はそのまま傀儡兵に向かっていった。

「ケケーツ!!」

マダラオトカゲのような戦士に傀儡兵が切り裂かれる。

「へっへっへ！ようやく俺の出番かよ・・・それにしても・・・趣味の悪いいやつらだな」

身体中から電撃を放ちながらカブトムシのような戦士がショッカーライダーの前に立ちはだかった。

「まとめてぶっ壊してやるからよ！！かかってこいや！！」

カブトムシの戦士はショッカーライダーに向かっていった。

「トオ！！ライドルステッキ！！」

海から現れた鉄仮面の戦士が傀儡兵を破壊していく。

「赤心少林拳！諸手打！！」

銀色の仮面の戦士が華麗な動きで傀儡兵とショッカーライダーを沈めていく。

「ZXキック！！」

忍者のような戦士が傀儡兵を破壊した。

「マシンガンアーム！！」

半仮面の戦士の銃弾で沈んでいくショッカーライダー。

「スカアアイキック!!」

スカイライダーのキックが傀儡兵を破壊した。各地に放たれた傀儡兵は破壊されていく。

そして太陽の輝きがショッカーライダー、傀儡兵を襲った。

「トア!!RXキック!!」

太陽の力を身に纏った最強の黒い仮面の戦士が傀儡兵を破壊した。

10人の男たちがここに集結した。

第十一話 炸裂！ダブルライダーキック！

第十一話 炸裂！ダブルライダーキック！！

「一文字さんを治せないんですか・・・」

なのはの言葉にリンディは顔を伏せた。

「残念だけど・・・私たちに彼を治す技術はないわ・・・彼のダイナモ・・・ローテクノロジーだけど技術が高度すぎるの・・・残念だけど私たちの手に負えない」

「そんなー!!」

「なのは！落ち着いて!!」

ユーノが必死に落ち着かせようとするがなのは取り乱している。するとリンディはあることを言った。

「方法が無いわけじゃない・・・」

「え？」

「今・・・海鳴をショッカーライダーが襲撃している・・・おそらくショッカーライダーは一文字さんと同じダイナモを持っているはず・・・そのダイナモを奪えば・・・」

「わかりました・・・」

「なのは・・・行こう!」

「うん!」

ユーノの転移魔法で海鳴に向かった。

海鳴では怪人の群れが襲い掛かっていた。10人の仮面ライダーが戦っているが敵の数が多すぎる。なのはは目的のショッカーライダーを見つけた。

「一文字さんを助けるために・・・風は空に・・・星は天に・・・」

なのははバリアジャケットを装着すると目の前のショッカーライダーに襲い掛かった。

「アクセルシューター!」

なのはのアクセルシューターがショッカーライダーに襲い掛かるがショッカーライダーは防御障壁で受け止めた。

「え?」

「なのは!このショッカーライダーたちプレシア・テストロッサの技術で強化されているんだ!生半可な攻撃は効かない!」

「そんな！」

「稲妻！！」

ショッカーライダーから稲妻が発せられるとユーノが防御結界でなのは守った。

「チェーンバインド！！」

「ユーノ君！」

「速くダイナモを！」

ショッカーライダーのダイナモを引き抜こうとするが傀儡兵やジュエルシードレプリカが集まり阻まれてしまう。

「きゃあああああ！！」

「なのは！」

別のショッカーライダーに吹き飛ばされたなのはその時一人の青年がなのはを受け止めた。

「大丈夫かい！？」

「あなたは・・・は・・・一文字さんを・・・一文字さんを助けるために・・・ダイナモが」

「一文字？一文字を知っているのか？」

なのはの発した言葉に青年は反応した。なのはは恐怖でいっぱいになりながら目の前のショッカーライダーにレイジングハートを構えた。

「う・う・…一文字さんが死んじゃう」

「心配するな」

「え？」

青年の発した言葉に反応するのは。

「・・・戦いが終わらない限り・・・仮面ライダーは死なない!!」

「あなたは？」

なのはが振り向くと青年は力を引き出す動きをとった。

「ライダー・・・」

青年の腰にベルトが現れた。

「変身!!」

青年・本郷猛のベルトの風車が回ると本郷は仮面ライダーに姿を変えた。

「仮面・・・ライダー」

「いくぞ!!とお!!」

本郷がショッカーライダーに向かって走った。

「ライダーパンチ!!」

次々とショッカーライダーを倒していく本郷。

「やめて!一文字さんを助けるにはダイナモが!!」

「残念だが・・・このショッカーライダーのダイナモでは一文字は救えない・・・」

「そんな・・・」

本郷は容赦なくショッカーライダージュエルシールドレプリカを破壊した。

一通り片付けるとなのはの前で変身を解いた本郷。

「あなたは・・・」

「俺は本郷猛またの名を仮面ライダー1号」

「1号・・・お願いします!一文字さんを!!」

「わかった・・・だから泣かないでくれ」

なのはの案内でアースラに到着した本郷はすぐに一文字の治療にかかった。

「こいつはひどい」

集中治療室に入った本郷。一文字のベルトは完全に破壊されている。生きているだけでも奇跡だ。

「結城ほどの腕前じゃないが・・・一文字お前を死なせるわけには行かない」

一文字のベルトの修理は困難を極めた。

しばらくして治療室から本郷が現れた。

「本郷さん・・・一文字さんは・・・」

「大丈夫だ・・・ダイナモは直した・・・後は一文字の生命力にかけるだけだ・・・」

「良かった・・・」

涙するなのは。だがクロノが。

「悪いけど感動している暇は無い・・・プレシアを止めないと・・・」

」

「はい！」

「俺も行くぞ」

「本郷さん？」

「根本を叩かないと海鳴への怪人の進撃は止められない」

「わかりました・・・」

クロノの案内で、なのは、ユーノ、本郷がアジトに向かった。その時

「く・・・う・・・」

一人の男の声が響いた。

なのは、本郷、ユーノ、クロノはアジトに乗り込んだ。

「とお！とお！」

本郷が先導しなのはたちの活路を開いている。

「アクセルシューター」

なのはの魔力弾が傀儡兵を破壊し置くに突き進んだ。すると奥から不気味な声が響いた。

「本郷猛だな」

「貴様は・・・」

本郷の前にコバルトドラゴンが立ちふさがった。

「本郷猛・・・いや仮面ライダー・・・貴様も一文字隼人共々貴様を地獄に送ってやる!!」

「なのはちゃん・・・下がっている」

「でも!」

「こいつは一文字を倒した・・・君が敵う相手じゃない」

コバルトドラゴンはなのはには目もくれず本郷のみを狙った。

「く!とお!とお!」

本郷の攻撃がコバルトドラゴンにヒットするが全く揺るがない。

「はっははは!一文字隼人の攻撃を跳ね返したこの身体貴様のパンチでは碎けん」

「それはどうかな・・・とお!!」

本郷が空高く舞い上がった。

「ライダーキック!!」

本郷のライダーキックがコバルトドラゴンに突き刺さった瞬間コバルトドラゴンは苦しみだした。

「なに・・・どういうことだ!？」

「貴様は慢心していたみたいだ・・・貴様の身体は既に一文字が砕いていた」

「な・なんだと・・・くうううう・・・食らえ!!」

コバルトドラゴンの口から怪光線が放たれた。

「ぐあ!」

「本郷さん!」

コバルトドラゴンの攻撃に本郷は変身が解けてしまった。

「く!」

「死ね!本郷猛!!」

コバルトドラゴンの魔力弾がなのはと本郷に襲い掛かるその時だった。

「とお!!」

一人の男がなのはたちに襲い掛かる魔力弾を蹴り飛ばしはるか彼方に追いやった。

その人物を見てなのはは感激のあまり涙している。

「い・一文字さん!!」

なのはと本郷の危機を救ったのは復活した一文字だった。

「待たせたな、なのはちゃん!!」

「一文字さん!!」

「一文字・・・」

なのはと本郷は一文字の復活を見た。

「本郷行くぞ!!」

「おう!!」

一文字と本郷が飛び上がると並び立った。

「ライダー・・・」

「変身!!」

「変身!!」

一文字と本郷のベルトの風車が回ると仮面ライダーに姿を変えた。
ダブルライダーがそろった。

「二人になったところでこの俺には勝てん!!」

「そいつはどうか？」

「いくぞ一文字！」

「おう！」

「トオー！！」

一文字と本郷が跳ぶとコバルトドラゴンは身構えた。

「ダブルライダーキック！！」

「ぐおおおおおおおー！！」

一文字と本郷のダブルライダーキックに吹き飛ばされるコバルトドラゴン。

「ぐ・ああああー！！」

既にダメージを追っていたコバルトドラゴンはそのまま倒れこんだ。

「一文字さんー！！」

なのはが一文字に抱きつく。

「よかった・・・よかったよお」

「へへなのはちゃん泣くなよ」

なのはの頭をなでる一文字。

「一文字」

「本郷世話になったな」

「なに・・・」

「それじゃ・・・いくか!!」

二人の仮面ライダーとなのは達は奥に向かった。全てに決着をつけるために。

第十一話 炸裂！ダブルライダーキック！（後書き）

予告

13人目の改造ソルジャー登場！！大自然の力を手に戦え仮面ライダー

第十二話 ライダー大進撃

第十二話 ライダー大進撃

ダブルライダーとなのはたちが奥に向かうと二手に分かれることになった。

「4人は動力炉に!!」

クロノが指示を出す。本郷はその場に残った。

「本郷さん？」

「先に行け……」

すると本郷の視線の先に傷だらけのコバルトドラゴンが迫ってきた。

「ま・まだだ・…まだ終わっていない……」

コバルトドラゴンは最後の力を振り絞り立ち上がる。

「こいつ……」

「死なん……ショッカーの最高のために」

「一文字……先に行け」

「本郷？」

「ここは俺が食い止める・・・お前は決着を着けに行け」

「頼むぜ!!なのはちゃん!行くぞ!」

「はい!!」

一文字となのはは奥に突き進むとコバルトドラゴンが後を追った。

「ま・待て!!」

「貴様の相手は・・・俺だ!!!!」

本郷がコバルトドラゴンの前に立ちはだかった。本郷の運動神経から数々の技が繰り出される。

「ライダーチョップ!」

「ぐおおお!!」

「ライダーキック!」

「ぬがあああ!!」

「ライダーフェイスクラッシャー!!」

「!!ごおおおおあ!!」

コバルトドラゴンに次々と技が刻まれていく。ダブルライダーキックを受けたコバルトドラゴンは思うように身体が動かない。

「があ・・・あああ」

「とどめだ!!とお!!」

本郷のベルトが凄まじい回転を起こした。

「ライダー電光キック!!」

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
お!!!!」

今度こそ破壊されたコバルトドラゴン。

「一文字・・・後は頼んだぞ・・・俺はここを食い止める!!行くぞクロノ」

「はい!!」

本郷とクロノは目の前に来る傀儡兵そしてショッカーライダーに向いた。

海鳴

「とお!!」

V3の攻撃が傀儡兵を破壊していく。空高く飛び上がったV3・

「V3!きりもみ3段キック!!」

V3の三連キックが炸裂し周囲の傀儡兵が爆発に巻き込まれた。

「ケケー！！！！大切断！！！」

アマゾンの手刀が炸裂しズタズタになるショッカーライダー。

「チャージ・アップ！！！」

ストロングアの胸のSのマークが回転すると身体がスパークした。

「超電！！稲妻キック！！！！！」

高圧電流を纏ったキックがショッカーライダーたちを飲み込んだ。

「とおおお！！！！！」

Xの体内のマーキュリー回路が起動した。

「真空！地獄車！！」

ショッカーライダー、傀儡兵を巻き込みながらXの地獄車が炸裂し最後にXキックが炸裂した。

「トオ！！」

スーパーが空中に飛び上がると赤心少林拳の型が決まる。

「スーパーライダー！！月面！キック！！」

巨大な月面を描いたキックがジュエルシードモンスターに炸裂した。

「衝撃吸収爆弾！！」

ZXの爆弾がヒットすると身体が赤く光った。

「ZXキック！！」

ZXのキックがショッカーライダーを飲み込んだ。

「ドリルアーム！！」

ライダーマンのドリルアームがショッカーライダーを貫いた。

「大回転！」

空中のジュエルシードモンスターにスカイライダーが飛び掛った。

「スカアアイキック！！！」

ジュエルシードモンスターを貫くスカイライダー。

「キングストーンフラッシュュー！！！」

RXのキングストーンフラッシュがジュエルシードモンスターを飲み込み一掃するとジュエルシードレプリカは一つに集まり巨大な水晶の竜になるがこれこそRXの狙いだった。

「リボルケインー！！！」

太陽のエネルギーを纏った必殺剣リボルケインをベルトから引き抜いたRX。

「トアー！！！」

ジュエルシードドラゴンに突き刺した。体内に収まりきらない太陽

エネルギーが噴出すジュエルシールドドラゴン。RXがリボルケインを引き抜き巨大なRを描くとジュエルシールドドラゴンは爆発した。

「トオ！トオ！！」

「はああー！！」

一文字、なのはが進撃しているが一向に減らない。アルフ、ユーノもサポートに回る・・・その時だった。

「サンダーレイジー！！」

金色の閃光が傀儡兵を襲った。

「いくよ・・・フェイトちゃん」

「うん・・・せーのー！！」

なのはとフェイトの最大の魔力を一文字が飲み込んだ。

「うおおおおおおおおー！！とおー！！」

一文字はそのまま巨大な傀儡兵に向かっていく。

「ライダー！魔導キック！！！」

一文字のキックが傀儡兵を貫き鎮圧された。

「一文字さん！」

「大丈夫だ・・・フェイト・・・よく来たな・・・」

「はい・・・」

照れくさそうにするフェイト。

「行くぞー!!」

一文字たちは奥に向かった。

「……は……」

次元断層の中一文字たちの目の前にはプレシア・テストロッサが立っていた。

「一文字さん……」

「大丈夫だ・・・フェイト・・・君の気持ちをぶつけてこい……」

「はい」

一文字の言葉にフェイトは前に進んだ。

「フェイトちゃん・・・」

「・・・信じよう・・・なのはちゃん」

一文字となのはは黙って見守った。

「私は・・・私はアリシア・テストロッサじゃありません・・・あなたが作った人形なのかもしれません」

フェイトが自分の精一杯の気持ちをアリシアにぶつけた。

「けど・・・私フェイト・テストロッサはあなたに生み出してもらったあなたの娘です!!」

「だからなに!? 今更母親面白とでもいいうの!？」

「あなたが・・・あなたがそれを望むなら・・・あなたは・・・私の母さんだから・・・」

フェイトの言葉に奥歯を噛むプレシア。その時次元震が響いた。

「一緒にいきましょうアリシア・・・今度はもう離れないように・・・」

力尽きかけたプレシアはそのまま次元断層に落下したそしてプレシアは呟いた。

「・・・ごめんなさい・・・フェイト・・・」

そのまま次元断層に落ちていったプレシアとアリシア。

そして何かの光がプレシアとアリシアを飲み込んだ。

「母さん！」

「脱出するぞ！！みんな！！」

「はい！！」

そう言っで一文字たちは脱出をした。

プレシア・テストロッサ、コバルトドラゴンが消えたことにより海鳴を進撃していた傀儡兵、ショッカーライダーは活動を停止し9人の仮面ライダーたちに鎮圧された。

事件が終わりなのはとユーノは表彰されていた。その姿を見届ける一文字と本郷。現在食堂で今後について話し合っている。

「じゃあ！家にいればいいよ！」

「ユーノ君がよければ！」

「おうおう・・・青春しているね」

なのは達を茶化す一文字。

「ちょっと一文字さん！」

「さっっとお邪魔虫は出るとするかね」

一文字はそのまま食堂を出た。

「一文字」

「・・・本郷」

「黙って行く気か？」

「ああ、いつもそうだっただろ」

そう言つと一文字と本郷は転移装置を起動させ姿を消した。

エピソード

エピソード

一文字が姿を消して数日。海鳴で再会するのはとフェイト。

「だけどうれしかった・・・まっすぐ向き合ってくれて」

「うん・・・友達になれたらって思ってた・・・」

「また逢えるよね」

「君が言ってくれた言葉友達になってくれるかって・・・どうすればいいのか・・・わかならい」

「簡単だよ・・・名前を呼んで・・・」

「なのは・・・」

「うん！」

「なのは・・・なのは・・・」

フェイトは嬉しそうになのはの名前を呼ぶ。やっとなのはの思いが通じた。喜びのあまり涙するなのは。

「どうしたの？」

「うん・・・一文字さんに見てほしかった・・・」

「私も・・・あの人に会いたかった・・・あの人に見てもらいたかった」

「フェイトちゃん・・・思い出にできる物こんなのしかないんだけど・・・」

「じゃあ・・・私も・・・」

なのはとフェイトはリボンを交換した。その時だった。

パシャ！

突然シャッター音が鳴り響きなのはとフェイトが振り向くが何もなかった。

「あれは・・・」

なのはが見つけたのはよく見慣れた物。その人物が大切にしていた物。

「一文字さんの・・・カメラ・・・」

一文字が大切にしていたカメラを手にするなのは。

「一文字さん！一文字さん！」

なのはとフェイトは一字を探すがどこにもいない。

「あの人が見ていてくれた・・・」

「うん・・・うん・・・」

また逢える。なのははそう確信していた。

一人バイクを走らせる一字。

「よかったな・・・なのはちゃん・・・元気だな・・・」

そう言っ—文字は風のように去って行ってしまった。

10年後

「これが・・・仮面ライダーのお話だよ・・・」

なのはがヴィヴィオに自分の昔のことを話した。

「なのはママその一文字さんに会ったの？」

「うううん・・・アレから一回も逢ってない・・・だけど信じているんだ・・・いつか絶対にまた逢えるって」

そう言いながらなのはは一文字のカメラを大切に持っていた。

「フェイトママも仮面ライダーに会ったことあるの？」

「うん・・・あるよ・・・」

「一文字さん？」

「一文字さんじゃないけど・・・なのはママが知らない・・・フェイトママの大好きな仮面ライダーだよ」

「え？それ誰？」

「それは・・・」

フェイトがハンガーに掛けてある革のジャケットを見つめた。

エピソード（後書き）

13人目の改造ソルジャー登場。

少女を狙う異型の生物。

少女を守る使命を受けた青年。

大自然の力をその手に戦え仮面ライダー！！

次回

リリカルなのは 深緑の男

お楽しみに

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9208/>

リリカルなのは 仮面の男

2010年11月18日22時08分発行